NO.94

蓬左

HÔSA

乙未本草会物品目録
（３頁・８頁参照）

名古屋市蓬左文庫
HÔSA LIBRARY CITY OF NAGOYA

展示室1・2　徳川美術館本館

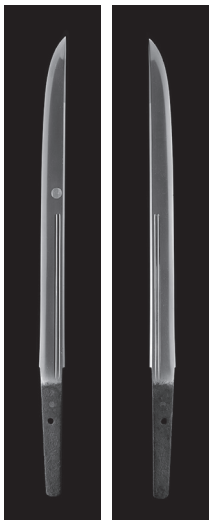
特別展
天下人の城 ―信長・秀吉・家康―

群雄割拠した戦国時代、各地に様々な城郭が築かれますが、織田信長・豊臣秀吉・徳川家康らが天下人への道をたどる過程で、石垣を主体とし高層建築である天守を擁する独特の城郭が生み出されます。

信長から秀吉・家康に繋がる天下人の城の系譜を追う中で、第一会場である蓬左文庫展示室では、地方豪族だった織田家・松平家の動向と、勝幡・那古野・清須・小牧・岐阜へと移った織田家の居城の変遷を紹介します。

それぞれの城にまつわる記録や発掘品の他、信長ゆかりの「脇指　蜘蛛切丸」「脇指　あざ丸」（共に熱田神宮蔵）と重文「刀　義元左文字」（建勲神社蔵　後期展示）の三振の刀剣は必見です。

なお、尾張国の統一過程で生じた今川家との境界紛争・桶狭間合戦は、信長の戦略眼のみが注視されていますが、織田家と今川家との城郭攻防戦であったことはあまり知られていません。今回の展覧会では、信長の名を天下に知らしめた桶狭間合戦の実態についても、遺された史料をもとに探ります。



脇指
銘 吉光 亀王丸
号 蜘蛛切丸

鎌倉時代　13世紀
名古屋市・熱田神宮蔵

桶狭間合戦が行われた永禄3年（1560）に、信長が熱田神宮に奉納したと伝えられる源氏重代の名刀です。平造で表面の中程やや切先寄りに、円い金象嵌が施され、巴紋を毛彫した珍しい意匠となっています。

色々威大鎧

南北朝時代　14世紀　愛知県・明眼院蔵

尾張地域における最古級の鎧です。源平合戦時の猛将・平（藤原）景清が着用したとの伝承がある大鎧ですが、形式的には南北朝期の作品で、『張州雑志』では織田家旧蔵との説を載せています。信長以前の織田家の動向を探る上で貴重な遺品です。

春日井郡小牧村古城絵図　江戸時代　17世紀　名古屋市蓬左文庫蔵

尾張藩によって実地調査された尾張国古城絵図の一つです。小牧山城は、信長が岐阜城へ移るまでの4年間ほど本拠とした城です。本図は小牧長久手合戦時に改修を受けた後の姿ですが、全山を要塞化した姿が詳細に描かれています。

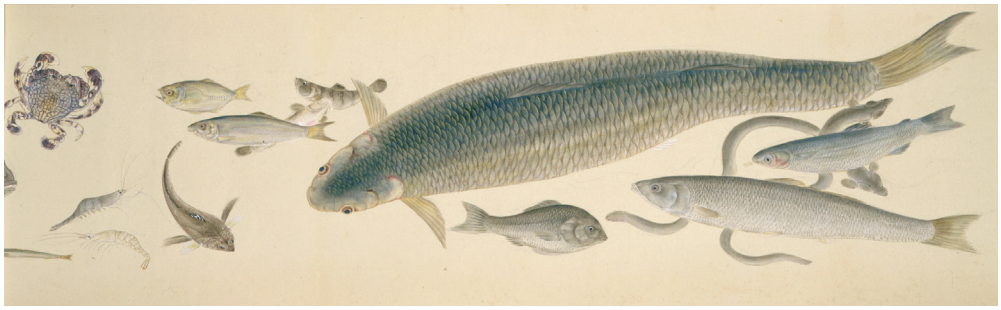
展示室1・2

企画展

江戸の生きもの図鑑 ―みつめる科学の眼―

博物学とは、一般的に動植物などの自然物を観察し、その種類や性質・産地などを分類して記録する学問です。日本においては、東洋医学の薬学にあたる「本草学」としてはじまり、江戸時代になると中国や西洋の新たな研究の影響を受けながら、いわゆる「博物学」へ向けて大きく発展しました。「図譜」はその研究成果の一つで、今でいうところの図鑑であり、対象が正確に、わかりやすく記録されています。ただ、写真のように対象をあるがまま写し取るというわけではなく、科学の眼で取捨選択された情報によって構成されているのが特徴です。

本展では、本草学者たちの知的好奇心に満ちた図譜の美しさに焦点を絞り、愛知県下に所在する図譜の優品を展示します。また、江戸時代における本草学の中心地の一つであった尾張地域について、伊藤圭介らの活動をたどりながら、尾張徳川家に残された本草学にまつわる品々を紹介します。大名から市井の人々までが知の探究に情熱を傾けた当時の本草学の熱気を、それぞれの作品から感じていただけたら幸いです。



築地名苑真景・草木虫魚写生図（部分）
江戸時代　19世紀　徳川美術館蔵
尾張徳川家に伝来した図巻で、草花・虫・魚を的確に描き、巻頭・巻末に築地の風景を配しています。魚が重なり合うように描かれるなど、対象を均一的に記録しようとする通常の図譜とはやや異なる性質を見せますが、全巻を通じて図譜に肝要な「写生」の精神が感じられます。

本草図説
高木春山筆
江戸時代　19世紀
西尾市岩瀬文庫蔵
魚類・植物・動物・鉱物など幅広く扱った195冊からなる世界最大級の図譜です。春山自筆の写生図は鮮やかな彩色と精緻な筆致が見どころです。

顕微鏡　伊藤圭介所用　19世紀　名古屋市東山植物園蔵
昨年度、伊藤圭介の子孫から名古屋市東山植物園伊藤圭介記念室へ新たに寄贈された品です。圭介は携帯用の顕微鏡も所持しており、これらを用いて観察した図が、圭介筆・編による図譜類にも掲載されています。大垣の博物学者・飯沼慾斎もほぼ同型の顕微鏡を所持していました。

東照宮祭の絵草紙売り

四月、といっても江戸時代の四月は、今で言うならば一か月半ほど後の時期にあたる。名古屋城下は青葉の季節も過ぎ、そろそろ梅雨の走りに入りかける時分で、人々は蒸し暑さを感じ始める。そんな四月の声を聞くと、城下の碁盤割では笛や太鼓、鼓など、にぎやかなお囃子の音があちこちから聞こえてきた。毎年恒例、卯月十七日の御神事「東照宮祭」にむけての準備が始まるのである。その嚆矢がお囃子の練習開始であった。

四月朔日から十二、三日頃まで、山車九輌を祭りに曳き出すそれぞれの町内では、道中囃子、人形囃子、帰り囃子といった様々なお囃子の練習が始まり、この練習を「内囃子（ナイバヤシ）」といった（『東照宮御祭礼濫觴之記』註一）。二福神車を曳き出す上長者町では、このお囃子の練習の折には宿元へ「内囃子」の札を掛けたという（『祭礼車取調書』註二）。

祭りもせまる四月十日、十一日の両日には、山車の組み立てが行われる。今のように組み立てたまま一年中保管できる山車蔵などない時代で、祭りが終わると翌年の四月までそれぞれの部材に解体して保管していた。その部材を取り出して、組み立てるのである。これをカラキダチといった。記録では「空木立」「素木建」などの字があてられている。

そして祭りの三日前、十四日には「車の引初（ヒキゾメ）」といって、自分たちの住む町内やその周辺の町内を曳いて廻った。夜には提灯も灯してゆらゆらと曳いた。そして、翌十五日には、競子（警固）とよばれる仮装行列に出る町内の人々が「けい子揃」として、町々を試し歩く。こうして町々の準備が進み、お祭り気分は一気に高まってゆく。

ところで、祭りの準備をするのは町民だけではなかった。祭りの行列には町奉行をはじめとして位の高い僧侶など、馬に乗る役職者も少なからずいた。この馬を調教する練習もお囃子と同じく、朔日から祭り直前の十六日まで、本町通りでおこなわれたのである。

曰く「一日に何遍となく、朝より暮るまで、御厩より御旅所辺まで、そろりそろりと、乗足をつめるようにおしへ、本町通りを上り下りする事屢なり。これを詰馬といふ」（『東照宮御祭礼濫觴之記』）。馬たちにとっては、歩幅を狭め、なおかつ「走り出さない」という日常とは正反対の練習を課せられたのである。

また御作事奉行は東照宮境内に舞楽の舞台を設置し、お偉方の見物席を遺漏なく用意する。寺社方は火消装束でしげしげとあちこちを見廻り、警備に余念がない。前日の十六日にはいよいよ本町通りの北端から末広町若宮辺まで、両側店先に竹矢来を組み、当日を迎える。祭りが始まれば辻々が固められ、終るまで道を横切ることさえまかりならぬという「御固め」となるのである。

十六日深夜丑の刻には片端（現在の外堀通）長者町辺より西の方、御園御門前へ提灯のゆらめく山車九輌が威勢良く曳き出される。この後山車を御園御門枡形へ引き入れるので、これら前夜の行事を「引込（ヒキコミ・ヒッコミ）」と称した。いわば前夜祭であり、これを一目見ようとする群集で深夜の片端はごったがえした。

夜明けの開門とともに、山車も警固行列の町人たちも三の丸郭内に入場する。順列に従って東照宮（現・能楽堂の東側あたり）へ参拝の後、南へ下って御厩に設けられた藩主の御覧所（現・名城病院のあたり）で拝謁に浴する。そして本町御門を抜け、いよいよ本町通りを南へ若宮八幡宮まで華麗な行列が進むのである。この行列を一目見たさの見物人をあてこみ、本町通両側の御店はこの日いずこも本業そっちのけで有料桟敷と化した。

御店と同じように、多くの見物人をあてこんで、年に一日、この日の稼ぎにかける者がいた。絵草紙売りである。高力猿猴庵が絵入りで著した『尾張年中行事絵抄』（註三）によれば、十四日の引初頃には「御まつりの絵双紙や絵双紙や」と呼んで売り歩いていたらしい。しかし稼ぎ時はなんと言っても人出の多い祭りの当日である。

当日の絵草紙売りの姿は、江戸時代中期、宝暦～明和頃（一七五一～七一）の状況を記す『張州雑

志』（註四）所収の「名古屋東照宮祭礼図」で、最末尾に描かれる見物人たちの中に描かれている（左図版）。細い竹に横長の山車行列図とおもわれる刷り物を何枚もぶら下げているが、これは竹の先を二つに割り、そこへ商品の刷り物を挟み込んで見物客に売り歩いているのである。よく見ると『張州雑志』に描かれる刷り物の山車行列図は彩色されており、この頃すでに多色刷の刷り物が売られていたのではないかと推測される。

多色刷ではないが、描かれるような横長の紙に東照宮祭の山車や警固の姿を墨刷とした刷り物がいくつか伝わっている（図版①～⑤：註五）。①～③はそれぞれ上下二段にわたって大母衣（ほろ）に始まる警固行列の様子を描く。段ごとにそれぞれ一～六の番号が表示されるので、一連のものであろう。④は山車九輌のみを描くもの、⑤は上七間町の警固行列（寿老人と唐子）を二枚にわたって描く。

横長に裁断しない和紙に山車九輌を多色刷で描くもの（図版⑥）もあり、描かれる山車の大幕・水引幕の姿から、江戸末期の制作と考えられる。これとほぼ同時期（宮町唐子車の大幕変更の時期から推測して安政七年頃）のもので、山車を一輌ずつ一枚の和紙に刷り（図⑦）、それを十枚続一組として販売したものなどもある。

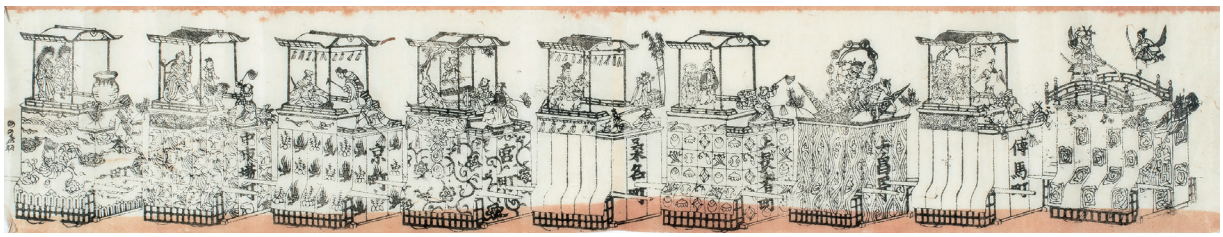
このうち、山車を一輌ずつ刷り物として売り出された先例としては、『金明録（猿猴庵日記）』（註六）文化三年（一八〇六）条に「当年、錦摺絵双紙新板出る。押切松宗板元也。但し、車一輌づつ細蜜（ママ）にせし一枚摺也」との記事がある。やはり山車の細部まで色鮮やかな刷り物が人気を博したのであろう。こうした東照宮祭の刷り物を売り歩いた絵草紙売りについて、伊勢門水は明治四十三年（一九一〇）一月に刊行した著書『名古屋祭』で次のように記している。

絵草紙　昔東照宮で往来に矢来を用ひた時代には、其通行を堰切らぬ時刻に多くの絵草紙売が出たもので、三尺斗の竹の先に山車行列の次第を摺った麁末（そまつ）な絵を何枚も挟んで、絵草紙絵草紙と呼んで売りあるいたものであるが、今では若宮祭り同様、祭車の前後には必らず二三人の絵草紙売が附随して来るが、昔ながらの風俗と云ひ、之れも又祭りの中の景色である。

茲に一ツ癇癪（かんしゃく）にさはるものは、此神聖な音楽を奏して進行する祭車の近傍をも憚からず、其雑踏を目的にさまざまの行商人がぞろぞろと出てくる。それもよいが、中には飴屋の笛、豆売りの太鼓、偖は人出を利用した広告屋のドカチヤガ囃子……、世が世ならば見事手討ちにして呉れうものを。（同書三六六～三六七頁）

明治維新の一時中断を経て、明治十四年（一八八一）、東照宮祭は無事に再興された。絵草紙も再び図⑧をはじめとして種々売られるようになったのはよいが、町奉行の先騎も御固めもなくなり、売らんかなの行商人がまとわりついて騒々しくなった行列に門水は辟易（へきえき）としているのである。

この翌年、明治四十四年（一九一一）四月十七日付名古屋新聞第二面には、文明開化の世らしく、洋風の帽子をかぶった東照宮祭の絵草紙売りの写真が掲載されている。かなり粗い画像な



上２枚：④山車行列図
⑤上七間町警固図
（寿老人と唐子）

中：⑦卯月御神事図より宮町・唐子遊車　絵巻物に仕立てる
本町三丁目（福井町）菱屋藤兵衛板元（十枚続）
安政６年（1859）、大幕を黄地唐草模様大紋羅紗に変更後の刊行

下：⑧名古屋東照宮神事山車引出シ之図　明治18年（1885）　茶屋町塚本康満作　東照宮刊
作者はこの他に明治17年御神事行粧之図（冊子）、明治20年例祭行粧之図（刷り物）なども発行

のが残念ではあるが、祭り当日の姿を知ることができる写真として貴重な一枚である。

この絵草紙売りについて、さらに時代が下って、昭和九年（一九三四）四月十四日付名古屋新聞第二面で、連載記事「近づく東照宮祭物語り（四）」の中に以下の記事が掲載されている。当時、愛知県第一中学校で国語科の教諭をつとめ、祭礼にも造詣の深かった石田元季氏の談話記事である。

祭礼風景として伝はってゐるものに絵草紙売りがある。祭礼の行列や山車を色刷りにしたものを竹の先きにつけて売ったもので、これは昨年まで呼び売りしてゐたのを見かけた。『仮名詩御祭礼』（註七）にも絵草紙売として

きのふ表で見た煎餅売
けふ早や性かへて絵草紙
先規古来のかた改めず
新車とて呼ばるいまだに

といふのがある。

絵草紙売は一年に一日だけの商売だから、その本職をさらけだしてゐるのも面白いと思ふ。【石田元季氏談】＝挿画絵草紙売りの図、伊勢門水氏筆＝

門水の描く絵草紙売りの姿は、明治再興後の姿であろうが、江戸時代の絵草紙売りと変わらず、刷り物を竹に挿し吊して売り歩いた。

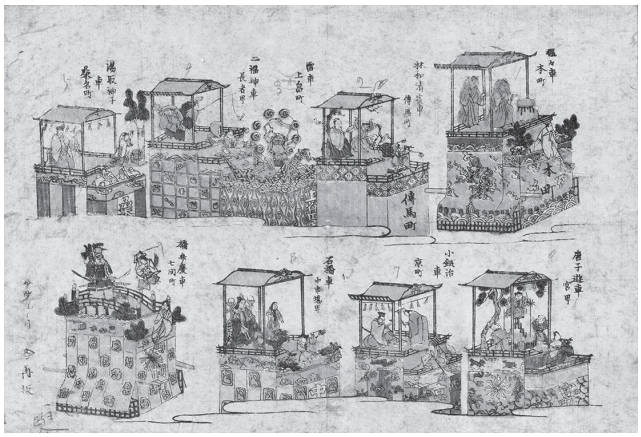
名古屋の市井の人々はこうした刷り物を買い求め、祭り当日の土産とした。しかし祭りは年に一日のみ。祭りの終わった後は、刷り物を眺めながらその勇壮な晴れ姿を愛で、翌年の祭りまでの楽しみとした。中には山車九輌の色鮮やかな錦絵を、一枚物ならば床飾りの掛け軸に、続き物を一組にして売られたものは和装本や絵巻物に、あるいは屏風にと、それぞれ好みの体裁に仕立てて鑑賞の用に活かした。

また橋弁慶車のからくり人形として人気の高い牛若と弁慶はくるくる廻るからくり玩具ともなって、子どもたちに人気であった。この他、東照宮祭の祭礼行列は廻り双六の題材ともなっていた。

このように、名古屋では刷り物やおもちゃ、果ては小ぶりに造られた山車を子どもが楫方（かじかた）よろしく町内を曳き廻して遊ぶなど、山車を愛でる文化が長く人々の間に息づいていたのである。

（蓬左文庫調査研究員　井上善博）

註　一、鶴舞中央図書館所蔵市史資料『東照宮御祭礼記』所収
二、鶴舞中央図書館所蔵市史資料
三、名古屋叢書三編第五巻一六九頁
四、蓬左文庫所蔵第二十～二十三巻
五、図版①～⑧はすべて名古屋市博物館所蔵
六、名古屋叢書三編第十四巻一九〇頁
七、名古屋叢書第十四巻文学編四〇八頁



左：⑥山車図
本町九丁目（鉄砲町）
菱屋久兵衛再板
掛け軸に仕立てる

右３枚：①～③
警固行列図（右上が警固先頭の大母衣）

表紙：乙未本草会物品目録（いつびほんぞうかいぶっぴんもくろく）　嘗百社（しょうひゃくしゃ）編　1冊　26.8×18.1㎝

乙未本草会物品目録

本書は天保六年（一八三五）、名古屋における本草学の大家・水谷豊文（一七七九～一八三三）の三回忌追善のため、豊文が立ち上げた嘗百社に属する伊藤圭介（一八〇三～一九〇一）らが、名古屋城下南寺町の一行院で開催した本草会の出品目録である。蓬左文庫の所蔵本は尾張徳川家十一代斉温への献上本であり、上質の料紙を用いるとともに、流布本とは異なり図に彩色を施している。

「本草会」（薬品会）とは、各地から収集した薬種、動植物、鉱物などを展示する一種の展覧会である。嘗百社は豊文の生前、すでに圭介の居宅で二度の「薬品会」を開いており、このときの本草会は三度目の開催であった。小田切春江著『名陽見聞図会』によれば、この本草会には夥しい見物人が訪れ、会場は立錐の余地もなかったという。

本書によれば、この本草会には嘗百社の人々が持ち寄った約四百点の品々が出品された。出品者には豊文の養子水谷儀三郎、圭介の兄で尾張医学館塾頭の大河内存真、奥医師で薬園奉行の浅井董太郎、三河寺部を治める尾張藩家老の渡辺規綱（又日庵）など多彩な面々が名を連ねており、尾張における本草学の広がりをうかがうことができる。

十九世紀の尾張における本草学は、全国的にみても屈指の水準に達していた。なかでも伊藤圭介は長崎に留学してシーボルトの教えを受け、文政十二年（一八三〇）にはツンベルク（一七四三～一八二八）の『フロラ・ヤポニカ』（日本植物誌）を翻訳して『泰西本草名疏』を刊行し、近代植物学の祖とされるリンネ（一七〇七～七八）の植物分類法を詳しく紹介している。本書の挿絵にもしばしばリンネ（西洋林那斯）の分類法に基づく綱目分類が記され、リンネの「二名法」による名称（「レセダ・オドラタ」（木犀草）、「ステイラクス・ベンソイン」（安息香）など）が付されている。さらに植物の挿絵にはリンネ分類の基準となる雄しべ・雌しべ（この名称を発案したのは圭介）の拡大図が描かれる。

本書は単なる本草会の出品目録ではなく、西洋の植物学をも貪欲に取り入れた、伊藤圭介を中心とする嘗百社の高度な学術的水準を示す重要な書物であるといえる。

（学芸員　木村慎平）

蓬左文庫

名古屋市蓬左文庫　〒461-0023 名古屋市東区徳川町1001番地　TEL（052）935-2173　FAX（052）935-2174

ホームページ　http://housa.city.nagoya.jp/〈蔵書検索もできます。〉

交通案内

■公共交通機関をご利用の場合

●名古屋駅より

【なごや観光ルートバス「メーグル」】名古屋駅バスターミナル11番のりば名古屋駅発着で平日30分～1時間に1本、土・日・休日は20分～30分に1本運行、④「徳川園・徳川美術館・蓬左文庫」下車徒歩1分

【市バス】名古屋駅バスターミナル10番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分

【名鉄バス】名鉄バスセンター3F　4番のりば基幹バス「三軒家」方面行「徳川園新出来」下車徒歩3分

【ＪＲ】JR中央本線、「大曽根」下車南出口より徒歩10分

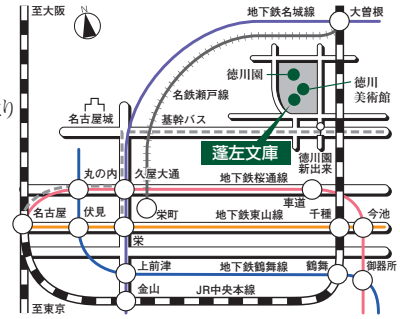
【地下鉄】東山線「藤が丘」方面行、「栄」で名城線「右回り」に乗り換え「大曽根」下車③番出口より徒歩15分　桜通線「徳重」方面行、「車道」下車①番出口より徒歩15分

●栄より

【市バス】栄バスターミナル（オアシス21）3番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分

■お車をご利用の場合

蓬左文庫専用駐車場はありません。徳川園駐車場（有料　30分120円）をご利用下さい。



ご利用案内

■休館日／月曜日（祝日・振替休日のときは直後の平日）※催事により変更することがあります。

12月14日㈭～1月3日㈬　特別整理・年末年始休館

■展示室／有料　一般：1400円　高大生：700円　小中生：500円（蓬左文庫・徳川美術館 共通観覧）

6月2日㈮～7月9日㈰、平成30年1月4日㈭～1月28日㈰の一般の入館料は1200円となります。

【開室時間】午前10時～午後5時（入室は午後4時30分まで）

■閲覧室／無料　館外貸し出しはいたしません。

【閉架図書】午前9時30分～午前12時　午後1時～午後5時　【開架図書】午前9時30分～午後5時

【複写サービス】保存など支障のない範囲で、CD-Rからのプリントアウトまたはマイクロフィルム複写などの方法により行います。電話・郵便による申込みも可。

蓬左文庫 Facebook

「蓬左」第94号　☆平成29年6月1日発行　☆編集・発行：名古屋市蓬左文庫　☆無料4,000部　☆不定期刊行　☆印刷：菱源（株）

※古紙パルプを含む再生紙を使用しています。